

# 天狗

室生犀星

青空文庫



城下の町なみは、古い樹木に囲まれていたため、よく、小間使いや女中、火の見仲間などが、夕方近い、うす暗がりのなかで、膝がしらを斬られた。何か小石のようなものに躓つまずいたような気がすると、新月がたの、きれ傷が、よく白い脛すねに紅い血を走らせた。それは鎌かまいたちに違いないと人々は言っていたが、その鎌かま鼬たちという名のことで、赤あか星ほし重じゅう右ううのことが、どういう屋敷うちでも、口の上へのぼった。

城下の北はずれの台所町に、いつごろから流れ込んだものか、

赤星重右という、名もない剣客が住んでいた。ふしぎなことには、かれが通り合せると、必ず彼の不機嫌なときには、きまつて向脛を切られた。というより不意に、足や額に痛みを感じ、感じるときは既<sup>も</sup>う額ぎわを切られていた。——それ故城下の剣客は誰一人として立向うことができなかった。おおおけぐち大桶口、さいかわぐち犀川口を固めている月番詰所の小役人達も、かれが通るとなるべく、彼を怒らせまいとしていた。それほど、女子供は云うまでもなく、中家老、年寄を初め、いったい彼が何故にあれほど剣道に達しているかということを不思議がった。が、誰一人として小脛を払うものさえ、広い城下にはいなかった。

それ故、かまいたちという、薄暗がりの樹の上にかがんでいる

鼠のような影が、いかにも赤星重右に似ていたから、人々は、鎌  
いたちとさえ云えば、なりの低い、重右の姿を思い出した。――  
晩方ばんがた、重右の屋敷へ忍び込んで見たものの話では、かれは何時いつ  
ものように普通の人なみに寝ていたが、しかし、得体のわからな  
い陰気な顔をしていたと答えた。かまいたちその物が、ひよつと  
したら赤星重右ではあるまいかと、人々は、蒼白い晩方の店さき  
や詰所などで、噂し合つて気味わるく感じた。が、べつに赤星重  
右は不思議な人物ではない。なりの矮いちいさ、骨格の秀でた、どこか  
陰気な煤皺すすしわの寄つたような顔をしていた。

城内では、得体のわからない赤星に盾衝く剣客がいなかったの  
で、かれをどうかして他の藩に追い遣るか、召抱えるかしなければ  
ならなかった。が、召抱えるということは、性の分らないこの  
剣客には、家老達も不賛成をした。何かの理由のもとで、何処か  
へ封じてしまったらという発議が、城内役人の間に起っていた。  
というのは、どう考えても、彼自身が何かしら憑きものがあるよ  
うな、よく町裏の小暗いところを歩いていたりしている様子が、  
どこか普通の人間離れしたところをあらわしていた。ことに、高  
堀や樹の上へ攀じ上ることが、殆ど目にとまらないくらい迅かつ  
た、たとえば、彼の右の手のかかった土堀では、その手が堀

庇しにつかまると同時に、もう、塀へいを越えてしまっていたからである。——そういう噂うさがつたわるほど、大手さき御門から西町や、長町の六番丁までの椎しいの繁しげった下屋敷では、鎌鼬かまごもが夕刻ばかりではなく、明るい白昼の道路にも、ふいに、通行人の脛すねか腰のあたりを掠かすめた、と、話すひとびとは必らずそのあたりの通りに、うす汚きたない重右の姿を見ないものはなかった。では、この赤星は内弟子でも取っていたかという、そういうものは一切とらなかつた。どうして食っているかさえ分らなかつた。台所町の彼の住居は、六畳の仲間部屋しかなかった。昼も晩も寝通しでいる事があるかと思うと夜中にふいに出て行くことがあつた。

地震の珍らしいこの城下では、よく赤星が樹の上へのぼり、樹

をゆすぶっていたというものさえ居た。そして地震の来るのを恐がりながら、緑葉の間から叫んでいた、と。

ともあれ、城内では、赤星重右を西方の、大乗寺だいじょうじさん山の奥峰

にあたる、黒壁という山頂の小さい社やしろうを中心にして九万歩の地所をあたえるという名義で、この赤星を封じることに決議された。

なぜというに、この決議からして赤星を憑きもの扱いにしている重右がそれを承諾するかどうかを試めしたのだった。ところが重右は却って喜んで、この黒壁の権現堂に上った。——が、それきり二年も三年も誰もかれの姿を見たものがなかった。雪の深いこの地方の冬をどうして越すだろうとさえ云う者も居なかった。

年に二度あて、村役人はべつに黒壁へ行きもしないで、彼の無



事であることを報告するだけで、役人自身も登山しようともしなかつた。いつの間にか忘れともなく、人々は赤星重右のことを口にしなかつた。というのは、れいの鎌鼬に脛を切られるものが、それと前後して居なくなつたのであるから——、が、やはり重右の話が出ると、ひとびとは、憑きものより外に、どうという特別な新しい考えを述べなかつた。

### 三

黒壁権現は、断岩の上にあつて、流れを徒歩でわたると、二条の鉄鎖が下りてあつた。誰が云うとなく、権現には天狗が住んで

いるというものが、次第にその数を殖ふやしてきた。雪の多い朝、雪を下ろしに屋根へ上った小者が、それきり吹雪のなかに行方知れずなつたことや、いまのいままで居た老婆が、ふいに縁側から辻すべり落ちたように見えなくなつたことさえあつた。それと同時に、誰がいうとなく黒壁の権現まいに詣るものが多かつた。えやみや足なえ憑きものの類が、ふしぎに願くまいをかけると癒なおるといふことだつた。そして供物や供米くまいを権現堂ごんげんどうにそなえてゆくばかりでなく、人々は、荒廃した堂宇どううに、多くの天狗の額を奉納した。それは土人形のような天狗の面を形作つた額面だつた。が、ふしぎなことに、その額面に金網をかけたものに限つて取下ろされてあつたから、人々は天狗を、金網に封じることを恐れた。

が、ここに不思議なことは、権現堂で白鼠の姿を見たものは、きまつて病気がなおると云われていたことと、決してその白鼠がちよろちよろと蝕むしばんだ板の間を這い歩いていることだった。いつのころと云うこともなく、白鼠が堂宇に充ちていたのである。

が、一つ不思議なことは、その人気のない堂宇に、れいの赤星重右がいつも供米や神酒に酔い痴しれて寝ころんでいた。が、滅多につとめて自分の姿をあらわすということがなかっただけ、人々は却つて赤星重右を天狗か何かのように敬まつていたのである。なぜというに、かれは決して饒舌しゃべるようなことがなかったし、特に起きて働くということがなかった。かれは、ただ、暇さえあればしゃが跼がんで唾を吐きながら居たのである。——ことに最もつと不思議

なことは、晩、登山したものが、この堂宇の裏から陰気な犬の遠と吼おほえのような唸うなりが絶え間なく漏れてくること、それが月夜の晩などには殊に酷く吼えたけつていふことが村人につたわつていた。實際堂宇である赤星重右がおかしなことには、月夜になると断岩や樹の下へ跼んで、その蒼白い顔を空に向けて、まるで犬のように吼えているといふことが、しばしば村人の目にさえ留るようになった。それがために、権現の靈れいげん顯げんに対してこれを疑うものはなかつた。

その年の秋に、赤星重右が断岩の陰つたところで、蠅のうずまきの中に、死体となつていふのを村人は見つけた。お城下の蘭医らんい派いはの菊坂長政は、それを一種の病毒不明の、併しかしながら何等かの

犬畜に犯されたらしい診断をしただけ、別に取り立てて噂うわさするものがなかった。が、村人はこれを丁寧ていねいにその堂宇どううのかたわらに碑いしを立てた。それと前後していつの間にか神の使者であるべき白鼠しろねずみの姿は次第に影をかくしてしまった。それ故、村人は赤星重右あかほししげを一種の、何かふしぎな天狗てんこうの一種のような、決しておろそかにできないもののような考えを持ち、それを祠ほこらのなかに加えたのである。

#### 四

——私はここまで話すと、客はすぐ微笑わらい出し、それは詰つまらな

い極くありふれた話だと云った。

「それは全然恐犬病なんだ。はじめから特殊な精神異常者にすぎないんだ。むかしの狐憑きとかいう奴はみないまの恐犬病なんだから。」私もそれに同意した。

「恐犬病はたしかなんだ。ところが今でもその黒壁には、権現堂があつて天狗がまつつてあるのだ。ことに僕の国の方ではその天狗というものが、実に流行つていなのだ。」子供の時分に、すこし外が暗くなると、すぐこの天狗が出るということを、母親や近所のものから教えられた。実際どういふ神社へ行つても必きつと天狗の額がかかつていたのである。

「だから古い樹にはきつと天狗が棲んでいと云われたものだ。」

「では今でも君はそういうことがあると思つていいのかい。」  
「そういう客に、私は頭を振つて見せ、これを否定いなんだ。」

「いや、ただそういう古い樹には古いと云う事だけ丈が人間に何かしら陰気な考えを持たせる丈なんだ。その外には何んでもない。」

私はそういうと客と二人で、黙つて対むかい合つた。古い樹といふものの沈鬱な、おおいかぶさるような枝ぶりが、私の目には暗いかげを作り、だんだん郷里の町の方へ、私の考えを連れ込んで行つた。





# 青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 室生犀星集 童子」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年9月10日第1刷発行

底本の親本：「室生犀星未刊行作品集 第1巻 大正※」[#ロ1  
△数字1、1-13-21] 三弥井書店

1986（昭和61）年12月15日

初出：「現代」

1922（大正11）年12月号

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2013年10月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 天狗

室生犀星

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>